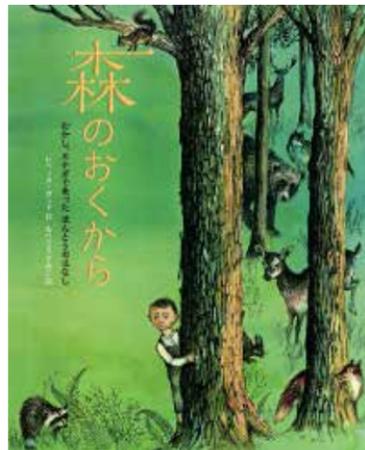


## 『森のおくから』

レベッカ・ポンド 作 ゴブリン書房



1914年のこと、5才になるアントニオは、カナダの森の中にあるゴーガンダ湖のほとりで、おかあさんが経営するホテルで暮らしていました。3階建てのホテルでしたが、しゃれたものではなく、旅行者や狩りをする人、森で働く人たちが利用していました。

夏、日照りが続き山火が発生します。逃げる場所がなく、人々は湖に逃げます。火がせまってくると、腰まで、さらには肩まで水につかって燃

えさかる森を見ているしかありませんでした。すると、森のおくから、動物たちも逃げてきました。キツネやウサギ、ヘラジカやオオカミ、さらには熊まで。「オオカミがシカのとなり、ウサギがキツネのそばにいます。人間とヘラジカも、からだかふれるほど近くに立っています。・・けものあつい息さえ、かかりました。」やがて火がおさまり、人間も動物も森に帰ります。

「人間と動物をへだてていたものが、あのあいだだけは、なくなっていたのです。」とても不思議な光景だったでしょう。このお話を読んで、ふいに私は「平和」について考えさせられてしまいました。

アントニオは作者の祖父で、作者はこの話をお母さんから聞いたそうです。

(遠藤)